

マイ・ストーリー

大石勘太

おおいし かんた

ぼくはこんな人

いつも周りの人との調和を保とうとするところがある。その場の雰囲気^{まわりのひと ちょうわ たも}をこわさないように、自分の気持ち^{ぶんきもち}を出さないことも多い。でも、無理^{むり}をしているわけではなく、自然^{しぜん}にそうなっている。大家族^{だいけぞく}の末っ子^{すえこ}として育ったので、そういう癖^{くせ}が身についたのだろう。友だちのあいだでもムードメーカー^{やくわり}の役割^{やくわり}をになっている。自分^{じぶん}では、思いやり^{おもいやり}があるほうだ^{おも}と思う。短所^{たんしょ}は、めんどうくさ^{めんどうくさ}がり屋^やなところ。

ぼくの座右^{ざゆう}の銘^{めい}は「昨日^{きのう}と違うこと^{ちがうこと}を言う^{いう}」ことである。最優先^{さいゆうせん}させることは時^{とき}と場合^{ばあい}によって変わる。その、時^{とき}と場合^{ばあい}によって変わるといことはすてきだ^{おも}と思う。つまり、枠^{わく}にはまらない思考^{しこう}をしたい^{おも}と思うのだ。

おいたち

小さいころ

「目を開けると、横たわったぼくを先生^{せんせい}やほかの園児^{えんじ}がのぞきこんでいる」。これが、ぼくの最初^{さいしょ}の記憶^{きおく}だ。5歳^{さい}のころだった^{おも}と思う。これ以前^{いぜん}のことは記憶^{きおく}にない。なぜないのだろう、とぼくは不思議^{ふしぎ}に思い、いろいろ^{かんが}と推測^{すいそく}した。そ

して、導き^{みちび}だされた結論^{けつろん}は、「ぼくは、本当^{ほんとう}はロボットだ」というものだった。こんなこと^{まぢが}は間違い^{まちが}いなくありえないのだが、子ども^このころはそれが真実^{しんじつ}のように思^{おも}われた。

幼いころ^{おきな}は、小ズルイ^こやつだった。ぼくは泣き虫^{なみむし}だったが、それを武器^{ぶき}にして、先生^{せんせい}を味方^{みかた}につけたりしていたように思う。6人^{おも}兄弟^{にんぎょうだい}の末っ子^{すえこ}だったぼくは、おばあちゃん子^こで、おばあちゃんにかわいがられた。

小学生のころ

小学生^{しょうがくせい}のときは、ファミコン^{だいす}大好き^{しょうねん}少年^{しょうねん}、通称^{つうしょう}「ファミッ子^こ」だった。学校^{がっこう}から帰^{かえ}ってくるなりファミコン^{ファミコン}をし、友だちの家^{いえ}に行^いってもファミコン^{ファミコン}をしていた。このころ^{ゆめ}の夢^{ゆめ}は、ゲームデザイナー^{ゲームデザイナー}になることだった。ファミコン^{ファミコン}に夢中^{むちゅう}で、小学5年生^{しょうがく ねんせい}のころには、勉強^{べんきょう}に対する興味^{きょうみ}は失^うせていた。本^{ほん}にも関心^{かんしん}はなかったが、ある日^ひ、たまたま寄^よった図書館^{としょかん}で1冊^{さつ}の本^{ほん}を借^かりた。作者^{さくしゃ}名^{めい}は忘^{わす}れたが、『少年探偵^{しょうねんたんてい}ブラウン』³という本^{ほん}だった。この本^{ほん}を讀^よんでから、ミステリー^{ミステリー}小説^{しょうせつ}にどっぷり^{どっぷり}とはまっ

中学生のころ

中学生^{ちゅうがくせい}になって新^{あたら}しくなったこと^{こと}はという^{いう}と、生徒^{せい}数が^{せい}増^まえ、算数^{さんずう}が数学^{すうがく}に変わ^かり、新た^{あら}に英語^{えいご}

が科目に加わったことくらいだ。でも、楽しい13年間だった。自分で考えることができるようになったのもこのころだ。小学生のころは、先生を疑うことなく、従順に従っていた。ひとつの小学校のなかで、小さな群れをつくっていた。しかし、中学校では、ほかの小学校の群れもやってくるので、それまでの小さな群れはくずれ、コミュニケーションが増えることになった。そうすると、自分で考えることも増えてくる。そして、先生のこぼれを疑ったり、反抗したりするようになった。

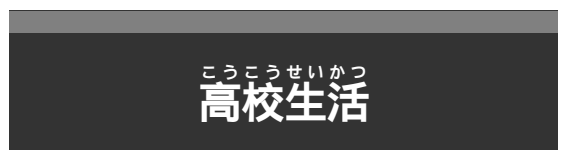
このころ、不良にあこがれていた。そして、実際不良グループに入っていた。不良グループは、アクセサリーをつけたり、授業をサボったり、校則を破ったり、場を盛りあげたりするような10人くらいのグループだった。このグループのなかで、ぼくはお笑い専門だった。皮肉を言って人を笑わせることにおいては、周りからも一目おかれていた。家でもしばしば道化の役をかってでたが、このグループのなかでもやはりそんな役をになっていた。

このころから、小説を書きはじめた。ミステリーのほかに、ロール・プレイング・ゲームに似たファンタジー小説をよく読んでいたのだが、「これならぼくにも書ける」と思い、ファンタジー小説を書いて、ある小説賞に投稿した。1度めは落選したが、2度めは1次選考を突破した。書きなおしの出来いかんでは、掲載のみこみもあったのだが、力不足で失敗に終わった。

そして、中学3年生のとき、エラリー・クイーン『Yの悲劇』を読んだ。それまで知っていた赤川次郎⁴などは目ではなかった。とにかく何から何

までぼくを興奮させつづけた。解決までの展開、そして、最後の解決にいたっては戦慄さえおぼえた。この小説で、本格ミステリーというものに完璧にまいってしまったのである。作品に対する目がこえた今でも、この作品は金字塔のようにそびえたっている。

とにかく、高校に入ってからのように、映画や演劇などについて批評したり、論じたりすることもなく、ただ気楽に友だちとつきあえた最高の3年間だった。



しんじゅくやまぶきこうこう 新宿山吹高校へ

どこを受験するか考えていたとき、ぼくにむいているのではないかと、母が新宿山吹高校を勧めてくれた。山吹高校は4部制⁵をとっていて、さらに時間割を自分で決められるという。それと、コンピュータ関連の教育が充実していることを知り、山吹高校を受験することにした。勉強に対する興味は失せたままだったが、勉強すべきだと考えるようになっていた。小説を書くうえでも、常識がなくては困るし、知識がないと考えかたが偏ってしまう。また、順序だててものごとを考えられるようになりたいと思い、コンピュータのプログラミングをやってみたいと考えた。

そして、山吹高校の第4部(授業が午後5時から9時まで)の情報科に進んだ。3年生になるまでは、昼ごろに起き、夕方に登校していた。したがって、いわゆる「放課後」とはまるで縁がなかった。3年生になってから、火曜日と金曜日は、授

ぎょう よる し あさ し
業のあと夜の10時から朝の8時まで、こづかいを

かせ
稼ぐため、ガソリンスタンドでアルバイトをした。

やまぶきこうこう りゅうねん
山吹高校には、「留年」というものがない。「6年

い ない たん い しゅとく
以内に80単位「を取得する」ことが規定されてい

るだけだ。楽をしたければ楽をすればいいし、勉

きょう
強したければいくらかでも勉強できる。ただ残念な

ねんかん たん い しゅとく
のは、年間30単位までしか取得できないというこ

とだ。40単位でも80単位でもとりたい人はさっさ

ととって、1、2年で卒業してもかまわないと思

うのはぼくだけだろうか。

やまぶきこうこう し かんわり ひとり こと
山吹高校では、時間割も1人ひとり異なるから、

くわすはあってないようなものだ。集団生活らし

いものがなく、とにかくマイペースで毎日を送

るのはいいことだ。ただ、自分を律することがで

きないと墮落してしまう。たとえば、自分は授業

があるのに、友人に授業がないことを知り、その

ゆうじん あそ やす
友人と遊ぶために休んでしまうというような場合

もでてくる。山吹高校は、「自分のことには自分で

せきにん ほうしん じぶん じぶん
責任をもちなさい」という方針だ。自分で自分を

りつ こうこうせい もと
律することを高校生に求めるのはいいことだが、

しょうがっこう ちゅうがっこう くんれん すこ
小学校、中学校でそのような訓練を少しも受けて

いない者に、そんなことを急に求めるのは少し酷

なことだろう。逆に、小学校、中学校で、もっと

じぶん りつ くんれん おも
自分を律する訓練をすべきだと思

うのだが……。

えんげき ぶ 演劇部

ちゅうがくせい えんげき きょうみ
中学生のときから、演劇には興味があった。もっ

い しょうがくせい しょうがっこう がくげい
と云えば、小学生のときからだ。小学校の学芸

かい げき で じぶん えん ぎ
会の劇に出たとき、自分は演技がうまいのではな

いかと思

ったのだ。ただ、残念なことに、中学校

えんげき ぶ おんな こ けいえん
の演劇部は女の子ばかりだったので、敬遠してし

まった。

こうこう まよ えんげき ぶ はい ねん
高校では、迷うことなく演劇部に入った。3年

せい きやくほん か みじか
生になってから、脚本をずいぶん書いている。短

いものを含めると20本くらいだろうか。小説を書

く時間などない。秋に開かれる演劇大会の前に

なると、朝からけいこづけになる。しかし、それ

い がい きごころ えんげき ぶ ゆうじん あさ
以外は、気心のしれた演劇部の友人たちと朝か

ら集まっては、くだらないことを考え、笑いあい、

けなしあい、自分勝手に敵をつくっては、公然と

ののしったりする生活だ。昼はみんなで飯を食

い、演劇のことなど二の次で、ただダラダラとし

ゃべる。まるで世界が自分を中心にまわっている

かのような感覚にとられることがある。夢の最

中にあるようなものだ。

えんげき 演劇について

えんげき げんたい
演劇は、現代でもっともダサイメディアだろう。

どんなに格好つけても、生々しさは否めないし、

なん い あざ えいぞう くら
何と言っても鮮やかさがなく。映像と比べると、

あんてん ぶ たいそう ち あざ
暗転にしる、舞台装置にしる、どこにも鮮やかな

リアリティーがないのである。ラジオのように想像

をかきたてられないし、映画のように切りとること

もできない。ましてテレビのような情報の多様さ

もないのである。しかし、それでもぼくは演劇が

す へんしゅう たらたら す
好きだ。編集されないあの荒々しさが好きなの

だろう。

えい が えんげき
映画でもテレビでもできないことを演劇でした

いと思

う。「人生ってこんなもんだよ」というような

ことを説くのではなく、ひらめきを人に伝えたい。

えんげき ひと なに うった おも かんぎやく
演劇で人に何かを訴えなくてもいいと思

う。観客

も何か学ぶことを演劇に求めるのではなく、ただ

ぶたい み かん おも
舞台を見て感じればいいのかと思う。

たいせつ 大切なこと

ぼくが大切にしていること、それは、自分と自分を取りかこむ環境すべてである。自分と周りの環境(これはときには他人であり、世界であり、宇宙であるのだが)とがつながり、お互いに影響を与えあっている。この「あるがまま」の状態をうけいれる、そして、そのうけいれたものに対して自分の思考がはたらく。そういう一連の流れを大事にしたいと思っている。枠にはまらない柔軟な思考をしたいと思うのだ。口でうまく説明できないが、説明できないからこそ大切であり、模索しつづけ、問いつづけるのだと思う。

いま にほん いや
今、日本は「癒し」ブームである。テレビ、アーティスト、歌、実用本など「癒し」をテーマとするものが多くでている。ぼくはこの風潮が心底嫌いである。ポップな絵に「癒し」のこぼれをのせる表現者が若者を中心に人気を集め、心を癒すための方法を解説した本が売れているようである。こういう類のものは、どれもこれもあたりまえのことを言っているにすぎない。あたりまえのことを、高圧的かつ断定的に言うものだから、みな一様に感心してしまうのである。そして、そのあたりまえのこぼれを金言として生きていこうとするのである。

しかし、それでいいのか。だれとも知らない人間に答えを与えられて、それでいいのか。それをたったひとつの答えとしてしまい、自ら問うことをやめ、日常に没してしまう。それで本当にいいのか。ぼくは、まだこぼれにできない答えがあるから、つたないこぼれを駆使して、それを表現すべ

しょうせつ か
小説を書いている。

しょうらい 将来について

ほんかく か
本格ミステリーを書きたいと思っている。なぜミステリーか。「ミステリー」という形式があるのがいい。その形式のなかで何が表現できるのかを考えるとところがおもしろい。しかも、エラリー・クイーンのように、洗練されていて、登場するすべてのことがしかけとなっていて、また解決の伏線となるようなものがあると思うのだ。そして、読後、ただ「トリックや解決法がすごかった」というだけではなく、「おもしろいストーリーだった」と感じられるものがある。それが本格ミステリーというものだろう。

かぞく とも 家族・友だち

かぞく ぼくの家族

りょうしん あね にん あにふたり にん かぞく う
両親と姉3人、兄2人の8人家族。ぼくが生まれたとき、母は39歳、父は51歳だった。いちばん上の姉とは14歳、いちばん年の近い姉でも6歳離れた末っ子のぼくは、みんなにめんどうをみてもらった。

りょうしん はたら だい かぞく
両親とも働いていたが、大家族ということもあり、家はあまり裕福ではなかった。母はとくに忙しかった。複数の仕事をかけもち、毎日、朝早くから夜遅くまで働いていた。どんなに忙しいなかでも、母は小学校の授業参観には必ず来てくれた。そのときは、あたりまえのように思っていたが、いまおも かんしゃ きも
今思うと感謝の気持ちでいっぱいになる。

きょうだいしまい かじ てつだ はんこう
兄弟姉妹はみんな家事を手伝っていた。反抗
き い ちゅうがくせい
期と言われる中学生のころ、こんないいやつら
(かぞく はんこう
家族)に反抗することなんかできない、と思っ
いた。

かぞく あんてい みまも
家族は、ぼくに「安定」をくれる。みんなが見守っ
てくれているという安心感がある。だから、家族は
なか おさな かぞく わ
仲がいいのがいい。幼いころから、家族の和を
たも どうげやく
保つために、よく道化役になった。

ぼくのとも 友だち

かぞく そんざい たい とも
家族はゆるしあう存在であるのに対して、友だ
ちみと そんざい とも かんが
ちは認めあう存在だ。友だちとは、考えているこ
とこうかん たが たか かぞく きらく
とを交換し、お互いを高めあう。家族より気楽に
つきあえる場合もあるし、家族のようにはいかな
ばあい とも かぞく ちが ち
い場合もある。友だちは、家族とは違って血が
ながっていないから。とお はな とも
遠く離れていたら友だちで
はなくなる。だから、だいじ とも
大事な友だちとはいっしょ
にいたい。

ぼくのまち、とうきょう 東京

ありとあらゆるくに しよせき て はい
ありとあらゆる国の書籍がこのまちでは手に入
る。なに にほん しよせき かんたん て はい
。何よりも日本の書籍が簡単に手に入るのが
いちばんいい。さまざまなことばとぶんか ないほう
文化を内包し
たにほん とうきょう じたい たいせつ じょうほう
日本、とくに東京は、それ自体が大切な情報
だ。しかし、それよりきょうちよう とうきょう
強調したいのは、東京はふ
つうだということ、ひとつのちほうとし
地方都市でしかない
ということだ。

ものがたり う しょうがい はな
ぼくの物語は、ここでしか生まれえない。生涯離
れられないであろう、ぼくのまち、それがとうきょう
東京だ。